

Living the Lotus

Buddhism in Everyday Life

New Year's Issue

2022

New Year's Message

生き生きした人生を

立正佼成会会長 庭野日鏡

「世界がぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない」を強く実感



あけまして、おめでとうございます」。

新型コロナウイルスの脅威^{きょうい}は、一昨年以来、日常生活に大きな影響を及ぼしてきました。最近、国内の感染者数が一気に減りましたが、世界では再び増加している国もあります。今後も油断することなく、感染予防に努めてまいりましょう。

本会の信者さんは、人を思いやることが身につけていますから、道場が閉鎖されても、電話や手紙、メールなどで手どりを続けてこられました。本当に頭が下がります。

私は、このコロナ禍^かを、人間が真に大切にすべきものは何かを見つめ直す機縁にしたいと申し上げてきました。

感染が拡大する中で「あの人は元気だろうか」「生活に困っていないか」「子供たちは大丈夫だろうか」と思いやることは、人間として一番大切な心です。そうした心を磨き深めていくことを通して、

日常生活を^{かえり}省みると、本来は^{はぶ}省いてもよいことがいくつもあるのではないのでしょうか。

「省」という字には、^{はぶ}省く、^{かえり}省みるという二つの意味があるとお話ししてきました。二年に及ぶコロナ禍を通して、お互いさま、何を省いたらよいか、何を省みるかが、一層はっきりとしてきたのではないかと思います。

このコロナ禍は、日本での感染が終息したとしても、他の国で感染が続けば、いつ再び脅威に^{さら}晒されるか分かりません。

宮沢賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉が強く実感されます。仏の大慈悲心を現代的に表現したといわれるこの宮沢賢治の言葉を、お互いさま、改めてかみしめたいものです。

こうしたことを踏まえ、私は「令和四年次の方針」を次のようにお示しました。

今年、本会は創立八十四周年を迎え、そして、法燈継承以来、三十年が経過いたしました。

今年次も自粛生活が続くものと予想されますが、新型コロナウイルスの感染状況を見据えつつ、信仰生活を通して、お互い様に、夫婦として、父母として、親として、未来を担う幼少年・青年達を如何にして育て、人格の形成をはかるか、如何にして家を^{ととの}齊えていくか、さらに、日本の伝統を受け継いで、如何にして立派な国を打ち立てていくか、創造的に真剣に務めて参りたいと願っています。

昨年、この紙面でお伝えしたように、夫婦（若い世代）、父母（壮年の世代）、親（高齢の世代）のそれぞれが、「人を植える（育てる）」という^{こんぼんめいだい}根本命題に全力を尽くすことは、本会のみならず、社会や国においても非常に重要なことです。

その基本は、何より家庭での教育にあります。齊家（家庭を齊えること）を通して、しっかりした人間教育、^{しつけ}躰がなされて初めて、学校での教育も充実し、本当の意味で「人を植える」ということに結びつくのです。

そして、現実家庭を齊えるには、「ご宝前を中心にした生活」と「三つの実践」（家庭で朝のあいさつをする。人から呼ばれたら「ハイ」とハッキリ返事をする。^{はきもの}履物を脱いだらそろえる）が重要であるとお話ししました。このことは、本会会員として、常に大事にしてきたことであります。

立派な国を打ち立てていこうという願いと 行動を一人ひとりが創造的に真剣に

こうした幼少年・青年達の育成と共に、「令和四年次の方針」では、「さらに、日本の伝統を受け継いで、如何にして立派な国を打ち立てていくか」という一文を加えました。

日本は上代の頃、国名を「大和（やまと）」と定めています。「大和（やまと・だいわ）」は、「大いなる平和」「大いなる調和」を意味し、その精神を終始一貫することを、国家的な理想としてきたのであります。

また、かつて聖徳太子は、「和を以て貴しと為す」という言葉を十七条憲法の第一条に掲げられました。この言葉に込められた精神は、当時の国づくりの規範であっただけでなく、いまでも日本人の国民性、精神性に深く息づいています。

さらに、日本の特徴である伝統と歴史は、天皇制にあるといわれています。

日本の皇室には私の姓、苗字がありません。いつの間にか私姓のない公家・公室となっていて、それは常に国民と一つになってこられた表れであります。建国以来、日本人が、さまざまな困難と直面しながらも、日本特有の豊かな文化、伝統を築いてこられたのは、いつの時代も天皇が国の柱石となり、そのもとに国民が「和」となって努力してきた結果と申せましょう。

一方、戦後の日本は、経済的な利益や合理性を追求し、日本の歴史、伝統、そこで培われてきた精神がないがしろにされ、忘れられてきたとさえ指摘されています。

いま、世界に目を向けると、自国第一の考え方が強くなっています。その中で、日本の伝統に込められた「和」の精神を十分に生かし、世界の中の日本として、さまざまな役割を果たすことが大事であると思います。

それには、何より自分の国がしっかりしていなければなりません。立派な国を打ち立てていこうという願いと行動を、政治家に任せておくだけでなく、国民一人ひとりが、さらに心を広げて、創造的に真剣に務めてまいりたいものです。

「心田を耕す」という言葉は、結局、 本当の自分を知ることと尽きる

さて、信行方針にも示しましたように、昨年十一月十五日で、開祖さまから法燈を継承して三十年を迎えました。振り返りますと、もう三十年経ったのかという感じが致します。



法燈継承式以来、私は、「^{いちれつおうたい}一列横隊。全体が一つになって出発したい」と申し上げてきました。

会員の皆さまは、一人ひとり等しく仏性を持っておられます。私も皆さまと同じように、一人の菩薩として、仏道を歩んでいきたい——その思いを言葉に込めました。

また、法燈継承した翌年の平成四年には、「親戚まわり」と称して、全国の百三十会場を訪問し、信者さんと触れ合う機会を頂きました。

私たちは、誰もが相互に関係し合い、依存し合い、影響を受け合いながら生きています。大きく見れば、人間だけでなく、宇宙の一切^{いっさいがっさい}が私たちの親戚ということが出来ます。その中でも最も親しい、心の通い合う親戚が、信者さんであることから、「親戚まわり」と言ってきました。

「親戚まわり」という言葉を耳にされた開祖さまは、「親戚という言葉が素晴らしい」「最近では日蓮が喜んで教会に行っている」と大変喜ばれていました。そして、「もっと早く法燈継承すればよかった」と冗談めかして話してくださいました。

しかし、法燈継承から、ほぼ八年後の平成十一年十月四日、開祖さまは九十二歳で^{にゅうじゃく}ご入寂されました。それまでは、何かあると、開祖さまにお願いしようという気持ちがありました。開祖さまは、自らのご入寂を通して、私たちが自立^{うなが}していくことを促してくださいましたように思えました。

開祖さまの教えを^{かんけつ}簡潔に表現すると、親孝行、先祖供養、菩薩行と、たびたび申し上げてきました。

とりわけ菩薩行は、ご法の中心をなすものです。自ら^{ぼだいしん}菩提心を起こして、菩薩行を歩むことでもあります。身近な言葉で表現すれば、^{いつく}慈しみ思いやる心で歩むことです。開祖さまが、一番おっしゃりたかったことは、そのことに尽きると思います。

最近では、開祖さまから直接ご指導を頂いた信者さんが少なくなってきました。開祖さまのご指導を通して得られた気づきや救われた体験を、ぜひ多くの方々にお伝え頂きたいと願っています。

法燈継承後、私が一番申し上げたかったことは、本当の自分を知ってほしいということでした。人を論じたり、世を論じたりすることは^{ようい}容易です。しかし、最も肝心なのは、自分を見つめ、知ることであります。

では、自分を知るにはどうしたらいいのでしょうか。その意識のもと、私は、教団創立六十周年の時から「心田を耕す」《「心田」(心なる田の意。心は仏の

種が植えられるよい場であることから心田といわれる)》という目標を掲げ、皆さまと共に今日まで歩んできました。

人間は、多くの場合、限りがある小さな自分を「これが自分だ」と固定的にとら^{とら}え、^{ひくつ}卑屈になったり、^{きょうまん}逆に驕慢になったりしがちです。しかし、それが本当の自分なのでしょうか。

お釈迦さまもまた、人間として悩み、苦しまれた末に、真理、法を悟られました。ですから、同じ人間である私たちは、本来、真理、法を^{えとく}会得する能力も、自ら問題を解決する力も^{そな}具えているのであります。

そうした本当の自分を知ることができて初めて、目の前のさまざまな問題も乗り越えることができ、そこから真に生き^{がい}甲斐のある人生が始まるのです。

ですから、「心田を耕す」という言葉は、結局、本当の自分を知るということに尽きます。いま、この世に生きている自分は、お釈迦さまと同じ心を持っていること、さらに人生と世界の問題を解決する能力と責任とがあること、その自覚をすることが、何よりも大事なことです。

法燈継承から三十年。そのことを自覚し、生き生きとした人生を送られている信者さんは、確実に増えてきました。一方、まだ本当の自分に気づいていない方も大勢おられます。

さらに手どり、お導きをして、ご法の精神を本当に具現化していける佼成会会員になることを切に願っています。

今年もコロナ禍が続く、本来の信仰活動には及ばないかもしれません。しかし、^{そくぜどうじょう}即是道場——いま、ここが、わが求道の間、修行の間との意気込みで精進し、そして、社会の最小単位である家庭を齊えて、未来を担う世代と共に成長していきたいものであります。

(『佼成新聞』令和4年1月2日号より)